



史料としての写真絵葉書

田中 傑（芝浦工業大学 PD 研究員／非文字資料研究センター 研究員）

1 速報するメディア

ここに『明治四十二年十一月一日 故伊藤博文霊柩虎ノ門通過ノ光景』と題された写真絵葉書がある（写真1）。写真は現在の文部科学省前（虎ノ門）の交差点から北北西の方角、ちょうど、現在の農林水産省庁舎（当時、海軍省庁舎）と東京高等・地方裁判所庁舎（当時、大審院庁舎）にむかって撮影されている。消印は撮影から3日後の「青山11月4日」である。

そして文面はこうなっている（写真2）（以下、判読不明箇所は*印を付す。また、読者の理解のため、句読点や単語をカッコつきで補う）。

「嗚呼、国家の元勳、世界の偉人逝けり（。）愈々明日は国葬式を弔ふ。学校は休みだから日比谷で不肖生も弔ふ積りだ（。）本日は青山練兵場で天下晴れの好日を利用して五十八誕生祝の観兵式は荘厳に且つ厳肅に挙行された（。）然し、ただ本年の観兵式は軍人は勿論文武百官胸中一の悲哀を含有して此の式に臨む日々（。）何ぞ図によりて判ぜられよ、図は是れ霊柩が新橋着後、霊南坂の官舎に至る光景なり（。）過日御尋ねの学院入学

の俄に**出来ると思ひますが若し志望なら聞いて上げましやろか。御国は余程寒くなつたさうで、我が東都は本日なんか、単衣と袷で尚暑い位だつたよ、ア一珍客なる余が従弟が訪問して来る、これで失敬。」

この文面は現代のわれわれに対し、写真絵葉書による情報伝達の（意外な）速報性を伝えている。すなわち、この発信者がこの文面を11月3日の天長節（天皇誕生日）に認めるためには、11月1日の正午以降（撮影された建物やひとびとの影の角度から、南中以降と判断）に撮影された写真が絵葉書となって3日の時点で市中に出回っていなければならないからである。



写真1 「明治四十二年十一月一日 故伊藤博文霊柩虎ノ門通過ノ光景」



写真2 宛名面



2 参加する「メディア」

先ほどの写真絵葉書を発信した人物が、絵葉書に写された伊藤博文の葬列を実際には見送ったか否かは明記されていない。そのため、発信者も受信者も共に伊藤の葬列を写真絵葉書というメディアを通じてのみ認識していて、両者の違いが単に「事件現場の近くにいたかどうか」に過ぎなかった可能性もある。

一方、次に示す『大正三年二月十日国民大会 警官群衆ヲ防止ス』という写真絵葉書(写真3)は、いわゆるジーマンス事件に際してなされた内閣弾劾決議案(当時の内閣首班は海軍大将、山本権兵衛)の否決に激昂した群衆が議会になだれ込もうとして警官に制止されている様子を写したもので、そこに記された文面によれば、発信者は事件現場に直接立ち会っている(写真4)。

「当日学校よりの帰り猛烈なる志士の演舌***午後一時頃比日谷(ママ)に立寄り政府の横暴圧迫に憤激せる国民は日比谷国民大会に参加しそれより雪崩を打つて議会前にと押し寄せ折角の警戒線は忽ち破られ益々群衆四方より集り見る見る議会前は左右から海軍省より(日比谷公園)西幸門付近にかけて充滿***雑沓を極め(、)早朝より押し掛けし群衆は、パン、煎餅を口に入らし公園鉄柵上よりヤレヤレの声(、)号外屋は必死となりてチリンチリン 暫くして君子を気取りて泰然と***楼へと引きあげた 敬白」

この文面には、絵葉書の写真が撮影された当日、政府と海軍の腐敗を糾弾する群衆が国民大会の会場であった日比谷公園から警戒線を突破して汚職の現場となった海

軍省(現、農林水産省庁舎の位置)、そして弾劾決議案を否決した帝国議会(現、経済産業省庁舎の位置)にかけての一带に結集し、汚職糾弾の意思表示をおこなった様子が一参加者の視点から描かれている。また、「暫くして…」という行では、この暴動事件が日常生活と隣り合わせに生じていたことも感じさせる。

もっとも、本絵葉書に記された情報そのものは受信者に達した時点では既に鮮度が低く、消印(「牛込2月18日」)は事件の8日後となっている。絵葉書の発行が遅れたためか、発信者が文面を認めるのが遅れたためか、それとも、単に投函し忘れたためか。受信者は当時、群馬県高崎市の歩兵第十五連隊に入営中の「カゴの鳥」であったが、それも旧聞が新聞なみの新鮮さを保持する理由にはならない。これはおそらく、一凡人である発信者が半分興味本位で現場に居合わせ、事件後も(警察のお世話になることもなく)平生と同じように時間を過ごせたという傍観者の状況にあったため、自らの見聞した事実をタイムラグなく伝える意志を欠いていたからではないだろうか。

写真3



写真3 「大正三年二月十日国民大会 警官群衆ヲ防止ス」

写真4



写真4 宛名面

3 写真絵葉書とeメール

ここで、写真絵葉書というメディアによって「情報(写真情報)」が伝達されていったプロセスを、「制作者(発行者)」、「発行者」、「受信者」の3者に分けて模式化して捉えてみたい(図1)。これによって写真絵葉書というものの性格、役割を明らかにしようと思うのである。

一般的な写真絵葉書は制作者が取材を通じて写真絵葉書の題材をメディア化し、そのメディア化された情報をまず発行者が入手(購入)し、次いで受信者に対して発信(郵送)する流れを辿る(図1中、「1」)。そこでは、発行者と受信者はともに写真絵葉書によって伝達された情報に対して「受け手」であり、両者の違いは情報に接した順番の前後だけにある。先に触れた伊藤の葬列写真葉書はこれに該当する。

このような発行者と受信者の関係は、日比谷の暴動の写真絵葉書においてはやや異なり、発行者は題材の現場に立ち会っていた。この場合、不特定多数にむけて大量に発行された写真絵葉書というメディアは、事件に直接参加した特定少数の人物にとっては自らの行動を記録・宣伝する媒体となっている(図1中、「2」)。もっとも、学校帰りに日比谷の暴動に参加した発行者は、暴動という題材を自らメディア化して伝達する能力をもっていなかったから、ここでいう「記録・宣伝」は制作者にとっての「記録・宣伝」とは質的に異なる。このように考えてみると、橋爪(2006)¹⁾は『画像入りの私信』という一点において「写真絵葉書が「最新のeメール」と繋がっているかもしれないと述べるが、当時の写真絵葉書による情報の伝達過程においては、今日のわれわれがeメールの送信に際して享受する条件(制作者と発行者が一致する)(図1中、「3」)はごく一部でしか成立していなかったといえよう。

4 写真絵葉書の類型と資料的価値

次に、写真絵葉書とその題材に着目して類型化してみたい。わたしの経験では、写真絵葉書には以下のような

写真5 「(東京名所) 靖国神社向大村銅像 The Bronze-Statue of Late Omura, Kudan, Tokyo.」

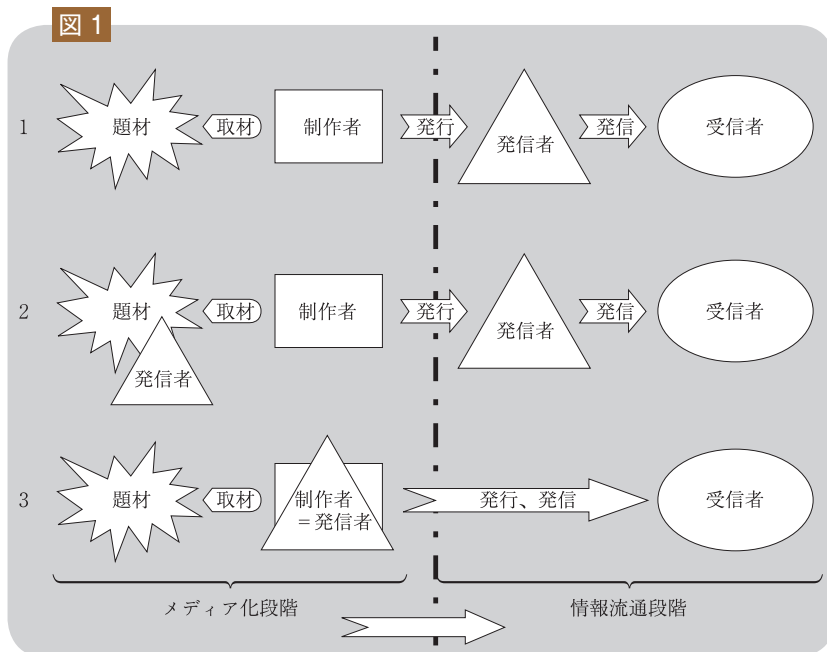


図1 写真絵葉書による情報伝達のプロセス

4つのタイプが存在すると考えられる。1つ目は「名勝や典型的風景、建築物」などが題材となっているタイプ(名所絵葉書)(写真5『(東京名所) 靖国神社向大村銅像 The Bronze-Statue of Late Omura, Kudan, Tokyo.』)、2つ目は「祭りや習俗、日常風景」などを伝えるタイプ(風俗絵葉書)(写真6『(玉川名所) 漁婦』)、3つ目は「事件や事故」などを伝えるタイプ(ニュース絵葉書)(写真1、写真3、前掲)、4つ目は「官公署、学校、商店の新築(開業)や事業内容、イベント開催」などを伝えるタイプ(宣伝絵葉書)(写真7、『東京市新橋駅前親切丁寧勉強 丸屋旅館』)である。

これまでに紹介した2枚(写真1、写真3)はこれら

写真5





写真6



写真6 「(玉川名所) 漁帰」

4つの類型のうち3つ目の「ニュース絵葉書」に該当する。また、先述した「制作者と発信者が一致するケース」は基本的には4つ目の「宣伝絵葉書」においてのみ観察される。

平時においてはマーケットが最も大きかった（その写真絵葉書を通じて情報を入手し、それを発信することによってそこに焼き付けられた情報をリレーしようとする人物が多い）のは名所絵葉書で、以下、風俗絵葉書、ニュース絵葉書（この種の題材は反復する性質にはないし、大量に印刷してもすぐに陳腐化するため、風俗絵葉書よりマーケットが小さいと考えられる）、宣伝絵葉書という順番で発行枚数が少なくなる。逆にこれら絵葉書を後世の我々の興味に即してその記録性、希少性に着目して順序をつけるならば、最も価値があるのはニュース絵葉書あるいは宣伝絵葉書であり、これらに次いで風俗絵葉書、そして最後が名所絵葉書ということになる。

5 都市史研究への利用可能性

最後に、わたしの専門である都市史の分野における写真絵葉書の利用可能性について言及したい。

写真7



写真7 「東京市新橋駅前 親切丁寧強 丸屋旅館」

わたしと同様に都市史を専門とする橋爪（2006）は、写真絵葉書の重要性を「設計図が遺されていない市井の店舗建築の様子を伝える史料」^②である点に見いだした。わたしの場合は、近代以降の建築・都市計画法規が橋爪のいう「市井の店舗建築」にどのような影響を与えながら運用されたのかに関心があるため、市街地の空間を面的に撮影した写真絵葉書を定点観測的に観察することが多くなる。

その際、「建築物は小さなものから大きなものへ、木造などの軟らかいものから鉄筋コンクリートなどの硬いものへと建て変わっていく」という仮定を置いている。また、法規の施行が市街地の空間実態に与えた影響について考察するために写真絵葉書の撮影年月を特定する必要があるが、写真絵葉書の多くには撮影年月が記載されていない。そのかわり、撮影場所はだいたい明記されている（誤記の場合もあるが）から、その場所において過去から現在にかけて一度は存在した人工建造物のうち、例えば道路基盤や大規模な建築物など各種の記録（土木関係の事業誌、建築関係の雑誌など）が存在するものが写り込んでいるか否かを手がかりに、撮影時点がそれらの

着工あるいは竣工の前か後かを比定するのである。

少しだけ例を示す。写真8と写真9は関東大震災後の京橋付近を撮影したものである。写真8では見渡す限りの焼け野原が、写真9では簡易な構造の仮設建築物（バラック）がいままに建てられつつある様子が、それぞれ写っている。写真8において2階建て（図中、a）、3階建て（図中、b）、平屋建て（図中、c）の3つの構造物の焼け残りをマルで囲んでいるが、これらは写真9の時点でそのまま残っていたもの（a'）、撤去されたもの（b'）、新しい屋根を掛けられて再利用されたもの（c'）と三者三様の運命を辿った。写真9を一瞥しただけでは復興のまちなみにバラックの真っ白い切り妻屋根が増えたことばかりが目立つが、写真8と比較することにより、新築されたバラックに対しての「地」ともいえる焼け残りの構造物が被害の程度や所有者・占有者の思惑の如何によってそれぞれどのように扱われたのかが明らかになるのである。

6 おわりに

以上、本稿は「史料としての写真絵葉書」を取りあげ、そのメディアとしての性格、写真の題材に着目した類型、研究に際しての有用性と利用方法を簡単に述べた。

宮武（1923）⁽³⁾は「従来の写真絵葉書は大概コロタイプ（硝子版）であつて、アートタイプ（銅版）の粗製物は絶無であつたが、今回（引用注、関東大震災）は数多く製造を急いだので、百中の九十九までは皆銅版であつた」という。今日の辞書ではコロタイプとアートタイプは同義語とされており、この言葉を文面のまま受け取ることにはできないが、震災を挟んで写真絵葉書の画質が著しく低下したことはわたし自身のこれまでの収集経験から強く感じる。明治・大正期のコロタイプ印刷による写真絵葉書では画像を拡大すれば様々な情報（看板の文字、通行人の服装など）が浮かび上がって来るのだが、昭和に入ったあたりから増え始めた網点印刷による写真絵葉書では画像をいくら拡大してもそこに浮かび上がるのは

写真8



写真9



「点」だけである。

この点を考えると、資料的に有用な写真絵葉書は昭和以前に発行されたものに限定されてくる。コロタイプという原始的で実直な表現が、網点という視覚科学的な代用表現に置き換わった頃、この世の中が機能主義・効率主義へと急速に傾きはじめ、街角からは個性（地方性）が失われ、画像の細部の拡大が不能であると同時に不必要になっていったのは非常に象徴的なことであると感じる。

(1) 橋爪紳也（2006）、『絵はがき100年 近代日本のビジュアル・メディア』、朝日新聞社、p.5.

(2) 橋爪（2006）前掲書、p.6.

(3) 宮武外骨編（1923）、『震災画報第二冊』、半狂堂、p.37.

本稿に用いた写真絵葉書はいずれも著者が架蔵するものである。